

---

# 魅月町・騎行の風

徳山 ノガタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魅月町・騎行の風

### 【Zコード】

N3039D

### 【作者名】

徳山 ノガタ

### 【あらすじ】

32歳・妻子持ちの初穂辰真はウダツのあがらない雑誌記者。社会人として、家長として、日々奮闘するが……・“町”自身が語る現代ドラマシリーズ・その3

## プロローグ・ようこそ魅月町へ

ん？ おやおや……これはこれは。三度<sup>みたび</sup>、あるいは再び、人によつては始めてお目にかかる。魅月町だ。

私の名前は魅月町。そして、これからお話しする話の舞台も、当然魅月町。……初めてこの町を訪れた人には、なんのことだかサッパリわからないだろう。

とにかく、私は”町”そのもの……とでも言つておいで。あまり深く考へないでくれ。

私はこれまで、二つの物語を語つてきた。今回もまた、新しい物語を紹介しようと思う。当然ながら、以前の話を知らないても問題はない。

前の二つはいずれも学生、（あるいは生徒）が主人公だったが、今回は違う。妻子持ちの社会人が主人公だ。

タイトルは……【騎行の風】

さあ、じ覽あれ！

## 第1章・低気（前書き）

初穂 辰真（はつほ たつま）

32歳・雑誌記者

何事にも一生懸命なのが災いし、すぐにテンパってしまう。酒・タバコは全くダメ。

## 第1章・低氣

「あなた……あなた、遅刻するわよ」

「……ん、ん～む……」

「今日は朝から会議じゃなかつたの?..」

妻がそういつた途端、男はベッドから跳ね起きた。

「もうだつた! マズイ!」

「ほひ、早く顔洗つて、『飯食べて』

男の名は初穂はつひは 辰真たいま 32歳。

「まつたく……カナはもう学校行つたわよ」

慌ててパジャマを着替える辰眞の背中に、妻・恵が声をかける。

「もう? 早いな

「今日から飼育係の当番なんですつて。昨日の夜言つてたじやない

「……」

正直に言つて、辰眞は全く覚えていなかつた。昨日まで手伝ひの出  
ない残業に追われ、クタクタになつて帰つてきたのだ。もつとも、  
昨日に限つた話ではないが。

「最近、忙しいからなあ……」

残念なことに、忙しい=仕事ができる、とは限らない。むしろ眞は要領が悪く、昨日の残業も自分のノースを修正するためのものだつた。

「そうやう、あなた

「なに……？」

朝食のスタートをホールで流し込みながら返事をする。

「来週の」となんだとさりげなく聞く。

(……来週……？　な、なにかあつたつけ？)

「ま、今年もあなたに任せるとよ。あなた、いつこのうの  
好きだから」

(……え、ええと……なんだつか？　なんだつたつか？)

「……あなた？　聞こてる？」

「うふふ時に、決してやつてしまはなことがある。それは……

「あ、ああ。そうだな。任せとけ」

……適当に応えてしまつたが、それも安請け合にしてしまつたが、  
である。

「それじゃあ、お願ひね。あら、電話」

妻が電話に出ていた間にビーフシチューを朝食を平らげ、仕事カバンを抱えて玄関に向かう。

「いってきまーす」

玄関のドアを閉めるとき、妻が小さく手を振つてゐるのが見えた。

……で、結局思い出せたのだろうか？

「なんだっけ……わからな……」

結婚して13年目。娘の香奈は小学6年生だ。辰真と娘は特に仲が悪いわけではないが、もう甘えてばかりもいないお年頃である。多忙もあいまつて、二人はここ最近あまり言葉を交わしていない。

辰真が勤めている会社は、週刊のローカル雑誌を扱つてゐる。辰真の仕事は、記事になりそうな事柄を探して文章化すること。いわゆる雑誌記者である。

「おはよひびきやります。初穂先輩」

「やあ、おはよ。犬飼くん」

あいさつをしたのは、去年入ってきたばかりの女子社員・犬飼である。

犬飼は26歳。明るく、ハキハキとした性格で、若手ながらもどこかアネゴ肌なところがある。6歳年上の辰真よりも遙かにしっかりとした頼れる人物である。

「髪、ちょっと崩れますよ？ 寝坊しましたか？」

「ああ、なんとか間に合ってよかつたよ」

よく気がつき、厭味なところがない。この会社では貴重な人材である。辰真と同じ記者だが、こちらは隣の区域の担当だ。

「おはようございます」

二人が担当の部署に入った途端……

「はーつーほーつー！」

いきなり怒鳴ったのは、上司の木場じぱである。

「なんだこれは！ こんなのを記事にしてどうするんだ！」

バサツと雑誌を床に叩きつける。犬飼がそれを拾つて、開かれていたページの見出しを口にする。

「……『5匹の犬が一列に並んで海岸沿いの道路を走る』」

「こんな『ふ~ん、そうなの。で？』という反応しか返つてこないようなものを記事にするな！ もつといいネタを探せ！」

「は、はい……申し訳ありません……」

そもそも、辰真が担当しているこの魅月町は至って平和な町で、雑誌に書くような出来事など滅多に起こらない。そのことは上司の木場もわかつてはいる。

「それでも、もう少しマトモなネタがあるだろ。次はキッチリやれよ!」

「ハイ……」

蚊の鳴くよいつな声でさういひのが、今の辰真には精一杯だった。

## 第2章・爽風（前書き）

犬飼 真奈美（いぬかい まなみ）

26歳・雑誌記者

仕事だけでなく、家事全般もそつなくこなせる。自宅には大量の自作ヌイグルミがある。

## 第2章・爽風

夕方、取材に出掛けっていた辰真がオフィスに戻ると、犬飼が一人で残つていた。

「お疲れ様です。先輩」

「おつかれ。一人?」

辰真はパソコンに向かつて記事の文書化をはじめる。犬飼も隣の席で同じ作業をしていた。

「今日も残業になりそうだなあ……」

ポツリと辰真がこぼすと、犬飼が顔を向ける。

「たまには早く帰つてあげたらどうですか? カナちゃん、今6年生でしたっけ」

「ああ。もう来年は中学生だ。まったく子供は成長が早いよ」

「早いですねえ……あーあ、私もあつという間にオバサンになっちゃつたな……」

「いやいや、君がオバサンだつたら僕はもうおじいさんじゃないか」

「フフフ……そうですね」

犬飼と話をしていると、自然に笑みがこぼれて疲れが取れる。

「あ、そういうん……」

突然、思い出したように辰真がつぶやく。

「どうしました？」

「いや……ちょっとね。大したことじゃないよ」

「そう言わると余計気になりますよ。話してください」

犬飼は手を休めて辰真の方に体を向ける。こうなれば話すしかない。辰真は今朝の妻との会話をことを犬飼に話した。

ちなみに、私は辰真の疑問の答えを知っている。去年も、その前の年も、私は「それ」を見ていたのだからな。が、今はまだ伏せておこう。

「ふーん……来週、ですか……」

「何のことだか、サッパリ思い出せなくてね」

「何かの記念日とかじゃないですか？ 女性って、そういうの気にしますから」

「そう思つたんだけど、結婚記念日も女房の誕生日も12月なんだよ。今はまだ6月だし……」

「うーん……初穂先輩が好きなこと、が関係してるんですねえ……」

ボールペンをアゴに当て、天井を見上げながら真剣に考え込む。一度首を突っ込んだら他人事にできないタイプらしい。

その様子を見て、辰真は話を変える。

「ま、まあ、ウチに帰つたら女房に聞いてみるよ。最初からそうすればよかつたんだ」

「そうですね」

「さひ、それじゃあ早いといふ仕事を終わらせないと」

そう言つてパソコンに向き直る。犬飼もそれに倣つた。<sup>なつた</sup>

解決につながるかどうかは別として、人に相談するということは割と気分が晴れることがある。辰真は幾分軽くなつた心でキーボードを叩くが、結局、仕事を終えることができたのは8時を過ぎてのことだった。

「ゴメンね、少し手伝つてもらつちゃつて」

「いえいえ、どうせ私は独り身ですから。遅くなつても誰にも怒られませんよ。……ああ、早く誰かいい人見つけなくちゃな……」

「犬飼君なら大丈夫だよ」

「そうですかねえ……」

小さく笑つて、犬飼は辰真に手を振る。

「それじゃ、また明日」

「うん。 またね」

ビルの前で犬飼と別れ、タクシーを拾う。いつもは歩いて帰宅しているのだが、今日は少しでも早く帰ったほうがいいと判断したようだ。

辰真の家は近い。すぐに到着して玄関を開ける。

「ただいま……」

「お帰りなさい。遅かったわね」

すぐに妻が出迎える。

「力ナは?」

「もういい」飯食べて、自分の部屋に引っ込んでるわよ

「やうか」

今日も、娘と顔を合わせる」とはできな「よつだ。

シャワーを浴び、温め直した夕食を食べながら、辰真は来週のことを尋ねようとする。

「なあ……」

「あなた、知つてる？」

「え、……なに？」

妻の方が一声早かつた。

「カナつたら、好きな男の子ができたみたいよ」

「ええつー…？」

思わず大声を出す。危うく茶碗を落とすところだった。

「同じクラスの子。神代君つていつて、野球クラブで、頭がいいんですつて」

「カナもそんな年頃か……早いなあ」

「遅いぐらいよ。今までずっとソフトボール一筋だったもの。ようやく女の子らしくなってきたわね」

「ああ、そうだ……な」

その夜、辰眞の頭の中は娘のことの一一杯だった。

(いざれ、その男の子を家に連れてきたりするのかな……一人だけで遊びに行つたり……相手がいい子だといいけど……)

結局、来週のことは聞きそびれてわからず仕舞いだった。

## 第2章・爽風（後書き）

辰真の娘・香奈は、実は【夢想の島】に登場した美晴の友達です。

### 第3章・寒、そして熱風（前書き）

初穂 香奈（はつほ かな）

11歳・小学6年

1年生の時からソフトボールに明け暮れる。が、運動神経は父譲りなのが残念。

### 第3章・寒、そして熱風

その日は、朝早くから太陽が照りつける暑い日だった。

「で……結局聞けないままもう5日……」

「ここまで来るともうすぐひどい暑さですねえ……」

畠に時間が空いた辰真と犬飼は、会社の屋上で話をしている。

「とりあえず、次の祝日に何かをやることだけはわかつたんだけど」「次の祝日つてもうすぐじゃないですか。もしも何か準備する必要のあることだつたら……」

「アウトだね……ハア……」

辰真はすっかり落ち込んでしまっている。家族と口々に「ノリノリケーションがとれていらない自分が、ひどく惨めに思えてるようだ。

「そ、そうだ、先輩、もう夏ですね」

犬飼が明るい声で話題を変える。

「私、去年までは毎年友達と海にいったんですけど、今年はどうかな……ジャーナリストにヒマはないですよね」

「あ、まあ……そこまで大忙しじゃないよ。この町では」

「先輩は、家族でどこかに行つたりするんですか？カナちゃんをプールに連れて行つたりとか……」

「プール、か。カナが3年生行つてないんだよのとき以来、一度も連れて行つてないな」

「じゃあ、今年はどうですか？」

「それが……」

辰真の頭の中に、苦い記憶が浮かんでくる。

香奈と最後に一緒に市民プールに行つた日。辰真是子供の頃からカナヅチで、その日も水着に着替えてはいたが、プールサイドで見守つているだけだった。

香奈はたまたま遊びに来ていた同じクラスの女子と一緒に遊んでいた。いや、正確に言うと、クラスメイトの女子とその父親の3人で遊んでいた。この父親というのが見るからに逞しい、『頼れる男』なのであった。そして、その男は辰真にこう言つた。

「初穂さん、一緒に泳ぎませんか？」

無論、その男に悪気はない。プールに来ているのだから、親同士の『ユニークーション』としては当然だろう。

「いえ、僕はカナヅチですから……」

と、辰真是言おうとしたが、娘とその友達の手前、少々カッコつけてみたくなつた。

（別に25メートル泳げってわけじゃないんだ。ただ水に入つて遊びだけなら……）

そう思つてプールに入った途端……

沈んだ。比喩でもなんでもなく、文字通り沈んだ。足をつったのだ。

「がつうばあつ、あ……がぶつ」

「お父さん!」

「初穂さん!」

その男がすばやく引き上げてくれたおかげで、辰真是助かつた。しかし、娘の前であまりにも無様な姿を晒すことになつてしまつた。

それ以来、初穂家ではプールはタブーになつていた。

「あの人は……井原さん、だつたつけな。確か」

独り言のようにブツブツとつぶやいていると、犬飼が声をかける。

「……先輩、せんぱ~い、聞いてます?」

「あつな、何?」

「どうしたんですか? 頬、真っ青ですよ」

「い、いやちよつと嫌な事思い出しちやつただけだから」

「もうすぐ昼休み終わっちゃいますよ。今日は午後から取材があつたんじやないですか?」

「ああ。小学生の野球大会だつたな。こんな小さなことでも記事にしなきゃやつていけないんだよなあ……ウチの会社は」

犬飼と別れ、一人で会場に向かう。試合の場所は、広い公園の中にあるグラウンドだ。

(そういえば、カナが好きだつて言つ男の子も野球クラブだつたつけ)

グラウンドには選手の小学生が続々と集まり、練習をしている。辰真はカメラを取り出して練習風景を何枚か撮る。人手削減のため、辰真はカメラマンも兼ねているのだ。

(たしか神代君つて言つたな。ああ、あの子だ)

丁度、その少年がノックを受けているところだつた。強烈なゴロを華麗にさばいて送球する。

(名前は才輝、か。なかなかハンサムな子だな。野球も上手い)

辰真はその少年を重点的に撮る。

(一枚だけアップの写真を撮つておいて、カナにあげたら喜ぶかな

……)

そう思つてゐる間に練習が終わり、選手が整列を始めた。

( も、仕事しなきや )

辰真は一塁側のフェンスの外に陣取り、カメラとメモ帳を構えた。

## 第4章・再び、寒

試合は進み、9回ウラ2-1で負けている。

「あ、あれは……カナ！？」

辰真から少し離れたところに固まっている女子の中に、香奈が遅れて入つていった。

(神代君を見に来たのかな……？)

まさしく、その神代がバッターだった。

「がんばって！」

女子たちがいっせいに黄色い声援を送る。

(ははは……大人気だなあ)

などと思つてみると、辰真のすぐ隣に座つてゐる男が声を張り上げる。

「しっかりやれよー！　オ輝イ！」

(そこか、って言つのか。彼は)

「女の子が見てる前で恥かくなよー！　つーか羨ましいぞー、コノヤローフー！」

どんな応援だ。

辰真は笑いをこらえようとしたが、成功しなかった。

そして、2ストライクに追い詰められたバッター ボックスから、快音が響いた。レフト線のヒットだ。2塁ランナーが帰れば逆転となる。

まず3塁ランナーがホームイン。そして2塁ランナーが3塁を蹴ったとき、バックホームの球が投げられる。

「間に合つかな……！？」

決定的瞬間を狙い、カメラを構える。

「とべえええええ！ 孝太郎！」

隣の男の声と同時に、ランナーとキャッチャーが激しくぶつかつた。

しばしの間呼吸をするのも忘れて、審判の声を待つ。

「セーフ！ セーフ！」

「やった！」

香奈たちがいっせいに湧く。

「スゴイ、逆転だ！」

辰真も自分のことのように喜んで声をあげる。が、その声はすぐ  
に落胆に変わるのであった。

その後、会社のオフィスにて。

「はーーつーーほーーつー

またもや木場の落雷だ。

「お前はなんで肝心のといひでじべじるんだー

「す、すこせん……」

やつてしまつた。辰真はやつてしまつたのだ。

「逆転の決まつた瞬間を……なぜ？ なーんーで！？ 摂り忘れる  
やつんだー？」

「あまりに熱中しそうにして、つー……」

「それでもジャーナリストか！ お前の役目は冷静に事実を捉え、  
明確に伝えることだらうが！ お前が熱中してビデオする！？」

「申し訳ございません……」

その後、長々と続く木場の説教からよけられ逃れた辰真は、一応  
記事のまとめ作業に移る。

「……先輩、大変でしたね」

隣の犬飼がコツソリ話しかけてくる。

「しょうがないよ。これは僕の責任なんだから」

「でも、熱中しないで試合を見てもその感動が人に伝わりますかね……」

「え？」

「ただの記録だけなら誰でもできますよ。生で見た感動をいかに伝えられるかが腕の見せ所じやないですか。新聞じやないんですから」

「そう、だね……スゴイことを言つね」

「や、やだ。そんな大したことじや……」

照れる犬飼の隣で、辰真は思つた。

(伝える、かあ。僕は本当に人に、なにかを伝えられるのかな……？ 娘とも口クに話ができていないのに……)

「あつ！」

突然、辰真は大声を出し、木場にジロリと睨まれる。

「どうしました？ 先輩」

小声で尋ねて来る。

「思い出した……次の祝日の」と

「えー？ な、なんだつたんですか？」

犬飼は身を乗り出して辰真を見るが、辰真はつづつな田で畠を見つめていた。

（約束を思い出せないのは社会人として失格。妻と上手く話せないのは夫として失格。そして……）

「誕生日だ。娘の」

「力ナちゃんの！？」

（娘の誕生日を忘れるのは、父親として失格……）

「なんで忘れちやうんだ！？ 僕は！」

「ちょっと、ちょっと先輩、声大きいです」

その忠告も空しく、再び落雷。

「仕事中にうるさいぞ初穂オ！ つーか思いつきり怒鳴つてもイマイチ迫力がつかない名前してんじゃねーぞ初穂！」

「す、すいません」

……木場よ、それは辰真に言つてもどうじよつもないぞ。

大きなミスをやらかしてしまった手前、「それじゃあお先に」とは言いにくい。その日も辰真は残業をするハメになった。

「フウ……ドリーム……写真は今更ドリームもないけど……」

「来週のことを思い出せたからいいじゃないですか」

「あれ、犬飼君。先に帰ったんじゃなかつたの？」

「生意氣にも『相談に乗つてあげようかな』なんて思いまして」

「ハハハ……ありがと」

犬飼が差し入れしてくれた缶コーヒーを飲み、もう一度ため息をついた。

「先輩、ため息すると幸せが逃げますよ?」

「ああ、昔からよく言われるね、それ」

「クヨクヨするのは置いといて。カナちゃんの誕生日、なにかプレゼント考えましたか?」

「うん。ウチでは娘の誕生日には必ずどこかに出掛けることにしようと約束してるんだ。……つてこれを最初に言い出したのは僕なのに、なんで忘れるのかなあ……ハア」

「ほり、またため息」

「おひと、しまった」

わざかに笑みがこぼれる。

「それで、ビルに行くか決めたんですか？」

「こやあ……まつたべ」

「混みますよ。」の時期の祝日

「うへん……そだよねえ。今からじや予約も取れないだろ」

辰真はため息をついて、グッと飲み込んだ。

「よしー。」

犬飼が突然大声を出す。

「先輩、私が残業代わりますから、今からでもネットドビリが探し  
てくださいー。」

「ええつー? 悪いよ、そんな」

「いえ、乗りかかった船は最後まで行かせていただきます。」の手  
書きの原稿を打ち込むだけでいいんですよね?」

「う、うそ……」

犬飼はすでに仕事の田になつてゐる。

「や、早く席かわつてください。ビニービニー…」

「は、は、はい！」

自分の席を追い出されて隣の犬飼の席に着き、パソコンの電源を入れた。

田武のパソコンが低い音をたててゆっくりと起動し始める。忙しいときにはこの間が苛立たしいが、今の辰真には心を落ち着かせる息継ぎになつた。

ふと、隣を見ると犬飼は猛烈な勢いでキーボードを叩いてゐる。

（もしもあのパソコンに自我があつたら、急にペースが速くなつてピッククリしてゐるだらうな……）

などと思つてゐると、ようやくパソコンが起動した。しばらくの間オフィス内にパソコンを扱う音だけが響く。

やがて、犬飼が大きく伸びをする。

「うへへん……終わりましたあ……」

「あ、」苦労様。ありがと」

「どいかいいといひ見つかりましたか？」

「とりあえず、U市の動物園にしようかなあ……と

「う～ん……あそこけつこいつ古いですケド。まあ見つかったならいいですね」

「うん。 ありがとう」

辰真はぬるくなつた缶コーヒーをすする。

「……フフ」

「な、なに？」

小さく笑う犬飼に、辰真が尋ねる。

「いえ、別に」

そう行つて犬飼は帰り支度をする。辰真はふと気になつて、声をかけた。

「ねえ、手伝つてもらつてこんなことを言つのもなんだけど……」

「はい？」

「犬飼君は……その、ずいぶん親切してくれるなあ、と思つて。相談に乗つてもらつたりして……」

「……」

犬飼はなにもいわない。沈黙がオフィスを支配した。

(あ、アレー？ 僕、なにかマズイこといつたのかな……？)

ドキッとして汗が噴き出す。汗を拭こうとポケットからハンカチを取り出すと、うつかり床にを落としてしまった。

「おつと……」

慌てて屈む辰真よりも早く、犬飼がハンカチを拾う。

「ゴメン。ありがとう。」

しかし、犬飼はハンカチをじっと見つめたまま動かない。

「ハ、ハハハ……それ、何日も洗濯に出し忘れちゃってて、くしゃくなっちゃってるんだよね……」

「そつくつ……」

「え？」

犬飼が微笑みながらゆつくりと顔をあげ、辰真にハンカチを渡す。

「そつくりなんです。先輩」

「だ、誰に……？」

「お父さんに。私が幼いころに他界した……」

微笑んでいるつもりの犬飼の目に、つづらと光るものがあった。

## 第6章・高氣

「お父さん」に似てる…………？僕が？」

「はい……」

ひとまず、一人ともさつきまで作業していった椅子に座る。

「そつくりなんです。仕草とか、雰囲気とか。とても。」

「……」

「暖かいコーヒーが好きなくせに猫舌で、いつもぬるくなつてから  
することとか」

「あ、僕もいつもねうだ

辰真は空になつたコーヒーの缶を見る。

「ハンカチもいつもお洗濯に出すのを忘れちゃつて、くしゃくし  
やになつたのを持ち歩いているんです」

「そうなんだ……」

「けど、私が小学校の3年生の時に病氣で……それからは親戚の家  
に預けられていたんです。」

「お母さん?」

何気なく尋ねると、犬飼は急に顔を伏せた。

「お母さんは、その……私が小学校にあがる時に離婚して……」

「えつ……」「、ゴメン。変なこと聞いて」

「いえ、いつそのこと、全部聞いてもらえますか？」

顔を伏せたまま、犬飼の話が始まる。

「私が生まれたのは本州です。両親が離婚した理由はわかりませんが、私が6歳、弟が3歳のときに離婚して、私は父と一緒に本州に残つたんです」

「……弟さんは、お母さんと？」

「ええ。弟はまだ3歳でしたから、母親と一緒にほつがいいと思って。それで母の実家である魅月町に引越したんです」

「じゃあ、弟さんは今もこの町に？」

「います。詳しい住所は知りませんけど」

「……」

「それで、私は本州で父と一人暮らしを始めました。父は家庭のことが苦手な人でしたから、自然に私が覚えるようになつたんです」

犬飼は小さく笑う。子供のように、屈託のない笑顔だ。

「男手一つで育てているものですから、休日遊んでくれることもなくて。それでも一生懸命な父の姿は、とても誇らしいものでした」

「カッコイイお父さんだったんだね」

「フフ……私にとっては、ですけどね。はたから見たらどうでしょう」

少し遠い目になつて、話を続ける。

「……でも、もともとあまり丈夫な人じゃないのに、強がる性質で。よく風邪をこじらせて、そのたびに『自分が働かないといけないから』と言つて無理に仕事に行こうとするんです」

辰真は黙つて聞いている。……いよいよ本題のようだ。

「ある日、40度近い熱があるのに出張にでかけたんです。『大丈夫だ。お土産買ってあげるから』と言つて玄関を出て行つて……それつきり、でした」

「……」

「今度は親戚の家に預けられました。そこの人はとても親切にしてくれださつたんですけど、私は悲しみ拭いきれなくて……それでふと思いついて、大学はこの魅月町を選んだんです。母の故郷がどんなところか、気になつて」

「お母さんに会つたの？」

「……いいえ。ござ、会おうと思つたら、ついしり込みしてしまつ

たんです。私がこの町にいることすら話していないんですよ。大学の寮に入つて、とにかく勉強に打ち込んで……」

「弟さんとも会つていらないんだね？」

少し間をおいて、細い声で答える。

「会つてない……ハズ、です。最後に会つたのが3歳のときでしたから、今どんな顔なのかもわかりませんし。もしかしたら、知らない間にどこかで会つているのかもしれませんけど」

「そう、かもね」

「大学を出て、最初は中堅の会社に入つたんですけど、なんだか馴染めなくて。それで思い切つてこの会社に転勤したんです」

「……」

「『そこ』でビッククリしたんですね！ 先輩に会つて、父にそっくりで……！ 私、すっかりここが気になっちゃいました」

「それで、僕とよく話してくれるんだ」

「はい。……だ・か・ら・先輩？」

「は、はい……？」

「しっかりしてくださいよ？ カナちゃんのこと、大事にしてくださいね」

犬飼はにつこりと笑つてバッグを取り、勢いよく席を立つ。

「それじゃ、私は失礼します。明日日、がんばって！」

そのまま、犬飼はオフィスを出て行つた。

「……ああ言われたら、がんばらなくつちや。うん。頑張ろっ」

一人残された辰真は、決意を新たにした。

そして、いよいよ香奈の誕生日を迎えた。

一家揃っての外出は、家族と「//ドニケーションをとり、夫として、父親として威厳を見せることができるチャンスだが……

「……しっかりしよ、あなた」

「『メン』……」

おやおや、まだ家を出ですらしないのに、TVのニュースを見ながら妻にしかられてくる。一体、なにがあつたのだろうか？

「まさか『きなり』潰れるなんて思わなくて」

「あんな今にも潰れそうな古い動物園なんか選ばないで」

……と、こうじて。今朝、その動物園の閉鎖が突然に決まつたらしく。

(せっかく犬飼君が手伝ってくれて調べたのに……なんでよつこつてこのタイミングで潰れちゃうんだろ？……)

早くもつまづいてしまった。しかし、今日の辰真はいつもと違つ。この程度でへこたれはしない。

「こんなこともあらつかと、もう一箇所候補地があるんだ」

と、元気付いて出発したはいいが……

「…………いつもの公園じゃない」

「…………」通学路の近く……」

「ほ、ほらー カナももう6年生なんだし、遠くに行くばっかりじゃなくて、もう一度近場を見つめなおすってのもいいだろ？ って、その、ハ……ハハハ」

公園は割と広く、以前述べたように隣にグラウンドがあり、その反対側の隣には深い堀がある。田舎たりのいい自然の豊なところだが、わざわざ家族連れて来るようなところだとはお世辞にもいえない。

「いやー、天気がいいなあ」

「で、公園まで来ただけこれからなにするの？」

「え、えーと……その、あ！ 向こうでなにかの練習やつてるぞ！ あ、ああああは、野球、かなあ、うん、あればカナと同じ小学校だな。ハハハ」

「えー？」

辰真は出来るだけせりげなく（白々しく）隣のグラウンドに移動する。

まさしく、野球クラブが練習に励んでいたところだった。

(神代君は……いた！「それで少しは機嫌が……」

「お父さん、ちよつと練習見に行つていい？」

(よしー)

「お父さん？」

「あ、ああ。いいよ」

「お～い……いいのか？ それで……。まあ、なにもないよりかはマシだらうか。

「いぐぞー！ 才輝！ オレの魔球打てるかあー！」

「ヤーユーセリフは……ぜともにストライクゾーンに投げられるようになつてから言えー！」

バシンー！

「ボール、フォア！」

「あーっちくしょーー！」

香奈はその様子をじっと見ていく。

「ちよつと、あなた……」

妻が辰真を公園に連れて戻る。

「これは、家族で出掛ける必要あるの？」

「えー……と、それは、その……ゴメン」

「今謝られてもどうしようもないわよ」

「……」

「氣まずい空氣だ。辰眞は無理に話題を変えようとする。

「あ、そうだ！ 力ナガ好きだつて言つてた神代君の写真、あげようか……？」

「……あ・の・ねえ、あなた」

「……」で、妻は大きくため息をつく。

「自分の色恋沙汰に父親が絡んでくるのって、年頃の女の子にとっては最もいやなことなのよ。気が利かないわね」

「……」

……効いた。これは効いたぞ。からうじて明るく振舞つていた（振舞おうとしていた）辰眞も、これには完全に参つた。

「そ、そつか……そうだよ、ね

がつくりと頭を落とす。それを見た妻が一応フォローを入れる。

「今のところ、カナが楽しんでいるのが救いね」

その香奈は、いまだに野球の練習風景に見入っていた。正確に言うと、練習に打ち込む神代才輝に、だが。

「次、孝太郎はいりまーす！」

先ほどピッチャーをしていた生徒がバッター・ボックスに入る。

「見てるよ才輝い！ バッティングのダイゴ!! はやつぱりホームランだ！」

そう言つて力強くバットを振る。

マウンド上から放たれた白球が吸い込まれるようにバットに当たる。カキーン、と小気味良い音がして、ボールは真後ろに高く飛んだ。

「あーーー ミスつた」

「おい、相当飛んだぞ、あれ」

そして、この大ファールが波乱を呼ぶのであつた……

## 第8章・乱気流

「あ……」

話をしていた辰真と妻の頭上を、ボールが飛び越えて行く。ボコン、と鈍い音がしてボールは自動販売機の上でバウンスし、再び高く舞い上がった。

「あつあつ、落ちる！」

ボールは見事に公園を突つ切り、反対側の堀に落ちた。

堀は結構深く、大人でも足がつくつかないかだった。

「すいませーん！　ボール、飛んで来ませんでしたか！？」

ユニフォーム姿の小学生たちが数人走ってくる。その後ろには香奈の姿もあった。

「ボールなら、そここの堀に落ちちゃつたけど……」

辰真が言つや否や、彼らは堀の縁に走つて行つた。

「あー！　水に浸かてる！」

「ひつたるー、お前が打つたんだから自分で取りに行けよお

「お、俺が……！？　俺、あんまり泳げないんだけど……」

「うたるー、と呼ばれた男子がイヤイヤと手を振る。

「大丈夫だつて。ちょっと拾つて戻るだけだろーがよー」

「でも……」

「やめた方がいい。……ここは結構深いぞ」

助け船を出したのは、才輝だつた。

「そ、そうだよな！ 才輝。こここの堀には入つてはいけません、て  
言われてるし……」

「なんだよー、ビビリ」

一人がけなすように言つた。

「なに！？」

「怖いんだろ」

「ち、ちげーよ！ わかったよ、行けばいいんだろー！」

「孝太郎……」

止めようとする声も聞かず、孝太郎は堀に飛び込んだ。

「へへ、余裕、余裕。確かに少し深くなつてるけど……」

ザブザブと水をかきわけてボールを拾う。

「おーい！ ボール投げるから受け取ってくれー！」

と、叫んでクルッと振り向いた瞬間

「うわっ！？」

「あ！ こうたるー！」

野球の練習によつて疲れた体で急に体の向きを変えたのがいけなかつたらしく、孝太郎は足をつつて水の中に沈んだ。

「孝太郎！ 大丈夫か！？」

才輝の緊迫した声で、辰真は急いで堀を覗き込む。

(溺れている！)

「がつづ……ぶはつ……あ」

「落ち着け！ 慌てるなー！」

水難事故というものは、冷静になればどうにか対処できることが多い。しかし、人間、特に泳ぎが不得意の者にとって、大量の水は恐怖の対象である。

水の中で自由に身動きが出来ない状況は激しいパニックを引き起こす。現在の孝太郎はそうなっていた。

「た、助けにいかなーと…」

一人が言つて飛び込もうとするが、才輝はそれを止めた。

「溺れているヤツにうかつに近付くと、自分まで巻き込まれるぞ。……なにか、ロープの代わりになるもので引っ張った方が…」

「そんなの、どうにあるんだよーーー…？」

「それは……」

才輝が返答に困つていると、突然香奈が叫んだ。

「お父さん…？」

いつの間にか辰真は上着を脱ぎ、堀の中に飛び込んでいた。

「お、お父さん…」

「あなた、やめてーカナヅチなのに無理しないでー」

香奈と妻が同時に叫ぶ。しかし、辰真是自分がカナヅチだからこそ飛び込んだのだ。

(水に溺れるのって、とも……とてもつらいことなんだー。スゴク怖くて、一分一秒でも早く助けてほしいんだーだから、助けなくちゃ……)

水の怖さを知っている辰真だからこそ、誰よりも早く行動を起すことができた。

「あの人、初穂のお父さん？」

一人が尋ねるが、それは香奈の耳に届かなかつた。

「泳げないくせに……戻つてよ！　お父さん！」

辰真は娘の声をかすかに聞き取りながら、水に入った。

（落ち着け。元々人間の体は水に浮くようになつていいんだから……）

少しづつ、少しづつ、孝太郎へと近づいて行く。全く泳げなかつた辰真にとつては、奇蹟に近いことだった。

「いいぞ！　もう少し！」

応援の声が入る。そして、ついに孝太郎のもとへ辿り着いた。

「もう大丈夫だ……う、うわ！？」

「あつ……ぶふあ、あば……」

パニックに陥っていた孝太郎は辰真にしがみつき、そのせいでバランスが崩れた。

「うあ！　わ……ガブつ……」

「お父さーん！」

「孝太郎！」

二人はもつれあいながら沈んでいく。想定していた最悪の結果だ。  
(や、やつぱりダメだつた……僕が都合よくいきなり泳げるようになるなんて……うぶつ)

自分自身もパニックになりかけていた辰真は、ふと、水の中であるものを見つけた。

それは、孝太郎の手にしつかりと握りしめられた野球ボールだった。

(こんなに大変な状態なのに、ボールだけは離さないんだ……大事、なんだな。とても)

そのことに気付いたとき、脳裏に犬飼の顔が浮かんだ。

しつかりしてくさいよ？ カナちゃんのこと、大事にして  
くさいね。

そんな声が聞こえたような気がした。そして、辰真是水を飲まないようになつかりと口を閉じて片腕を伸ばし、もがく孝太郎の体をつかまえた。

……それから、なにがどうなったのか辰真自身は覚えていない。  
気が付いたとき、辰真と孝太郎はコンクリートの足場の上に倒れていた。

「やつた！ スゴイぞ！」

薄い意識の中で、辰真は大きな歓声を聞いていた……

ヒューローク・季節はずれの春一一番

「お——う——は——」

おやおや、朝っぱらからまたもや木場が辰真に大声を出している。

(あ、あれ？ 僕、今度は何をやらかしたっけ？)  
けど、とりあえず謝つておこう

「スミマセンでした……」

辰真は深々と頭を下げる。しかし

はあ?  
なにやつてゐんだ、お前

「え？（謝り方が足りないのかな？それじゃあ）本当に、申し訳ありませんでした！」

もう一度、さつきよりもさらに深く頭を下げる。

」  
...  
！」

(  
.....  
?)

ようやく、木場がすれ違いに気付いた。

「いやいや、やうじやなくてだな。初穂、お前もやれ、まだやうじや

「え？」

辰真は驚いて顔をあげる。

「まあ、記者としてはやや微妙だが……人間として、よくやった」

「はあ……」

未だにボンヤリしている辰真に、木場がなにかの原稿と写真を放り投げる。

「ついでに、仕事の方もそのくらい頑張ってくれよ」

そう言つて木場は自分のデスクに戻つて行つた。

「なんのことだろ?……」

辰真は席について渡された原稿と写真に目を通す。

「あー、これは……」

「上手く撮れているでしょう?先輩」

「犬飼君……」

オフィスに入ってきた犬飼はイタズラっぽく笑つて辰真の隣に座る。

「正直に言つて、少し心配だったので。コソソリ後をつけさせていました」

「み、見てたんだ。」「」

「フフ。おかげでおいしいネタがとれました。ほら、コレ見てください。カナちゃんのすげえ嬉しそうな顔」

新たに手渡された写真には、香奈の喜びが写っていた。

「……どうですか？ 大したものでしょ？」

「いや、その、カワイイなあ。やっぱりウチの子は」

「つてそっちですか！ 優めるのは」

「あ、ハハハ。ゴメンゴメン。犬飼君もスゴイよ。ちゃんと仕事を両立できてるんだから」

「冷静に真実を伝えるのが仕事ですからね。……でも、見てるだけつてのもソライですよ。人の危機に仕事してる場合かつて葛藤が……」

そう言つて犬飼はわざとらしく頭に手を置く。

「でも、先輩がなんとかしてくれたって信じましたから、安心して見守っていました。」

「そ、そう？」

ハツキリ、「信じてこひ」と言わされて照れている。

「じゃ、先輩。この原稿預けますよ」

「え？」

「前に行つたじゃないですか。自分の体験がないと人には感動が伝わりにくいくつて。だから、この続きは当事者に任せます」

犬飼は原稿を辰真に押し付け、そのままオフィスを出て行く。

「あ、お~い、犬飼君……」

「私、朝一から取材予定があるので。それでは」

足早に歩き、犬飼は会社の建物から出る。

そして、辰真のいるオフィスを見上げて小さくつぶやいた。

「……がんばってね。おとーさん」

原稿を前に記憶を探る辰真の顔には、ほんの少しだけ力強さがあった。ふと、頭に浮かぶのは娘と妻の笑顔。

(今日は早く帰つて、一緒に晩ごはん食べよう)

働く男の心に、季節はずれの春一番が吹き渡つた。

不器用に生まれ持つた男は、なにかと気苦労が多いものだ。

さて、辰真よ。今回は上手くいったが、娘はそろそろ反抗期を迎える年齢だ。まだまだこれからが正念場だぞ。まったく、年頃の娘といつものは……

……と、子育て談義は置いといて、いかがだったかな?今回の話は。

もちろん、その後の彼らについてもじっくり話すことはできる。しかし、この町にはまだまだ、「語りられるべき物語」が存在するのだ。

今度この町を訪れることがあれば、その中の一つを紹介しよう。

……私の名前は魅月町。また、会つ口まで。「じめづき」よ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3039d/>

魅月町・騎行の風

2010年10月12日04時01分発行